

小川正夫略年譜（付・著作目録）

V 小川正夫略年譜（付・著作目録）

一八九五（同）

一九〇二（同）

一九〇八（同）

一九一〇（同）

一九二二（同）

小川正夫略年譜（付・著作目録）

一八四八 歴

二年令

事

項

一八九五（明二八）

○才

一月十二日、関西、中京一円に名を知られた米穀仲買商、

②小川鶴三郎、ひさの長男として名古屋に生まれる。

一九〇二（明三五）

七才

愛知県名古屋山吹小学校へ入学。

一九〇八（明四一）

一三才

愛知一中へ入学、寮生活に入る。学業、成績は良かったらしいが、この頃から親や教師に反抗的となり、いわゆる不良

性をおびた行動が多くなる。

一九二二（明四五）

一七才

軍事教練拒否、寄宿舎の規則違反、教師のつるしあげ等を

理由に、一中を退学させられる。

同年、明倫中学へ転校。

一九二三(大 二) 一八才
東大受験に失敗。同志社大学英文科へ入学。京都で下宿生活。祇園に好きな女性が出来、送金された学資の殆んどをつぎ込む。講義に全然出席しなくなり、中途退学、帰郷。

一九二六(大 五) 二二才
やかましく云われるも、家業を継ぐ意志なく分家して、しんと云う女性と見合結婚。

長女、秋子生まれる。

一九二七(大 六) 二三才
米騒動当時、父鶴三郎は神戸の仲買人、某と中部、関西方面にかけて米買占めの張本人であり、焼打ちに合い逃げ廻る。その過中に身を置いて、民衆の怒りとその力を始めて知ったと良く話していた。

その前後を境として、社会主義思想に近ずいたものの如く、焼残った米倉の中に閉籠り、一ヶ年間世間との交流を断ち、読書三昧にふける。

一九二九(大 八) 二四才

長男、春郎生まれる。
離婚して家出、(この間、北海道まで流れてミカンの荷役

一九三二(大 十一) 二七才

人夫等、三ヶ四年いろいろ放浪したらしい。)

滋賀県米原で、某女と心中、自分のみ生残り警察の連絡により親元へ連れ戻される。

この心中で相手の女性が死んだこと、生残った自分は自殺補助罪として取調べられたことは、大きなショックで、法律観、人生観に影響を与えた。

一九三三(大 十二) 二八才
フランスへ行くつもりで東京へ出て、アテネフランセへ通う。

一九二五(大 四) 三〇才
父の死に合い帰郷、渡仏の夢坐折。

一九二六(大 五) 三二才
家業を継げと云う親族縁者の意向を退け、米穀仲買業を廃業。

一九二七(昭 二) 三三才
この頃より伊申英治、成田政市、篠田清氏らとの交流始まり、アナキズム運動に近づく。

一九二九(昭 四) 三四才
坪川照子と二度目の結婚。同年十二月、次女エマ生まれる。
一九三〇(昭 五) 三五才
名古屋鶴舞に、個人で労農図書館設立。やがて失敗、継承した財産の贅沢な浪費生活。シンパ的な立場で交友広がる。

一九三一(昭 六) 三六才
長男中学入学を機に上京して、三鷹市牟礼に居を構える。

生協運動に近ずき、石川三四郎、新居格等と交流。立川近郊、宮沢に土地を買い共同農園を始め、三多摩地方の農民を対象に活動。農民文庫開設、脱穀機の原価販布、貸与などと共に青年の組織化に専念。

一九三三(昭二二) 三九才
下北多摩郡宮沢の共同農園で夏、府中署の手入れをうけ引っぱられる。当時、大森の銀行襲撃事件があり関係があると思われたらしい。一ヶ月間留置される。

次男、淳、生まれる。

一九三八(昭二三) 四三才
一九四一(昭二六) 四六才

冬、三鷹市井の頭の自宅で検挙、不敬罪で巣鴨西多摩刑務所に二年三ヶ月服役、共同農場解散。

原因は、この時に下宿させていた朝鮮人大学生にアナキズム理論を説いていたが、意見の相違からか密告された。大切にしていた本等、ほとんど、この時に没集された。

三男、潜、生まれる。

一九四二(昭二七) 四七才
一九四三(昭二八) 四八才

出獄後、城西生協に土地、事務所等、寄附してそこに働く。戦争のため愛知県常滑市大野町に疎開。

一九四五(昭二〇) 五〇才

三女、朝江、生まれる。

一九四六(昭二二) 五一才

日本アナキスト連盟発足と共に加入、「平民新聞」名古屋支局の中心となり、約二十年間、名古屋地協責任者として私生活を投打って活動を続けた。その間機関誌等に論文執筆を精力的に行った。現在判明しているものは、次の通りである。

十一月「タッカーについて」を「平民新聞」七号に発表。

一九四七(昭二二) 五二才
一九四八(昭二三) 五三才

一月「ソ連の楽壇近況」を「平民新聞」五六号に、二月「蠢動する反動勢力二つ」を「平民新聞」六二号に、六月「大衆と協調する道」を「平民新聞」七七号、「社会主義いろいろ」を「自由新聞」一一五号に発表。

十二月「法務省の商法改正について」を「広島平民新聞」五四号に発表。

一九五〇(昭二五) 五五才

一月「イギリス労働運動の突変」を「広島平民新聞」五六号、六月「芸術はスターリンを愛せず」を「白い羽根」をそれぞれ

「岡山平民新聞」九、一〇号に発表。

一九五一(昭二六) 五六才

一〇月「アンケートに答え」を「アフランシ」七号、十二月「アナキズムへの接近」を「アナキストクラブ」四号に発表。

一九五二(昭二七) 五七才

一月「馬の骨」を「広島生活新聞」一一三号、「相互扶助論

①「アナキスクラブ」五号、四月「書評、マルクスに代る学説」「新文化」一号、六月「解体期の芸術」^{九〇}「広島生活新聞」一二五号、「第九交響楽とバクレーニン」^{九〇}「福岡平民新聞」一八号に発表。

一九五三(昭二八)

五八才

三月「真空地帯」と「K大佐」^{九〇}「福岡平民新聞」四三号、一二月「連盟可否の問題を何処へ連れて行くべきか」

「アナキズム」七号に発表。

一九五四(昭二九)

五九才

一月「方法についての覚え書」「アナキズム」八号、五月「連盟大会での感想」「アナキズム」一二号、八月「最近に於けるソ連農業政策の変異について」「アナキズム」一六号、一〇月「K氏へのお答え」「アナキズム」一八号に発表。

一九五五(昭三〇)

六〇才

一月「原水爆問題について」「アナキズム」一九号、二月「自由共産主義インスターの考え方について」「アナキズム」二〇号、三月「アフランシ」二五号の「アンケートに答え」、一〇月「アンケートに答える」「造型」二号、一二月「インドにおける一大土地変革」「アフランシ」三〇号に発表。

一九五六(昭三一)

六一才

一月「インドのブーダン運動」「連盟通信」四号、三月

『原子力平和利用』『ひろば』二号、五月「ルイセンコの追放をめぐる」『クロハタ』四号、『生産と消費を結ぶ生活協同組合の創り方』『働く者の経済』、六月「オートメイションとその政治的表現」『クロハタ』六号、七月「第一インターとバクレーニン」『東欧に於る動乱やデモの真因』を「クロハタ」八、九号に、八月「宗教の政治的関与について」『クロハタ』一〇号、十一月「糞蠅と送り狼にはさまれて」『クロハタ』一七号、一二月「石川さんの思い出」『クロハタ』一九号、『権威主義、シュールリアリズム及び反社会主義リアリズム序論』『NON』一この作品の年代は推定して発表。

一九五七(昭三二)

六二才

三月「性についての断想」「ひろば」五号、八月「ハンガリア事件について」「連盟通信」二二号、『学校教育について』アン・リネルの教育観』「アフランシ」三四号に発表。
一〇月「フルシチョフの分権主義」を「フリーダム」(一九五七・四・二〇)より翻訳(未発表)。

一九五八(昭三三)

六三才

二月「技術と原理」「ピラ撒きと勇敢な詩人」『クロハタ』

一九五九(昭三四)

六四才

二六号、四月「人工衛星と大掃除」「ひろば」九号、八月「古さについて」「ひろば」一〇号に発表。

一月(推定)「バクレーニンのペシズムの問題」「合同通信ビラ」、二月「大沢論文をめぐって①」「ヒロバ」「一三号、十一月五月「大沢論文をめぐって②」「ヒロバ」一三号、十一月「スペイン革命の実存的側面と、その教訓」「無政府研究」一四号、「伊勢湾台風被害現地便り」「クロハタ」四七号に発表。

一九六〇(昭三五)

六五才

八月「^住結婚、家族と革命との関係について」「無政府研究」一六号に発表。

一九六一(昭三六)

六六才

「アナキズムの立場からの性問題」を二月から十一月にかけて「クロハタ」六二、七一号に発表。

一九六二(昭三七)

六七才

五月「ヨハン・モスト(アナキズム、人と思想)」「クロハタ」七六号、六月「名古屋地協例会報告」「連盟ニュース」六号、「クロボトキン」「フランス革命史」によるアンケート①と②を九月及び翌年二月に「現代アナキズムの会」に発表。

一九六三(昭三八)

六八才

七月「新しい理想郷について」「あかつき一号」、八月「人間の疎外について」「物の見方について」「あかつき」二号、「利潤追求と自由と平等の関係について」を九月から一二月に渡って「あかつき」三号、八号に発表。一二月「原始社会と社会的神話(ケインズ・マドック)」を翻訳(未発表)。一〇月以降(推定)「アナキスト無頼漢ラブソディ」をパンフとして発表。

そして、あと「目的と手段」「一家心中」「ある外国人と虚無僧の話」は「あかつき」に載せるべく書かれたものと思われるが未発表。

一九六四(昭三九)

六九才

一月「三池の爆発と鶴見の衝突」「自由連合」九四号、三月「違反の質的变化」「自由連合」九六号、四月「イロコイ・インデアンの復活運動」「自由連合」九七号に発表。

「バクレーニンの悪魔(アンドレイ・ジイドの無償行為)」未発表。(執筆年月日不明)

一九六四(昭三九)

六九才

一月一九日、路上での転倒により脳軟化症となる。二二日頃より病勢悪化、駆付けた同志たちや家族に見とられ、一月

